「主イエスの死」

2022年07月08日

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。（マルコ福音書15章34節）

すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。イエスに向かって立っていた百人隊長は、このように息を引き取られたのを見て、「まことに、この人は神の子だった」と言った。（マルコ福音書15章38節～39節）

主イエスは午前九時に十字架につけられた。人々は罵り、嘲りの声を浴びせた。昼の十二時になると、全地は暗くなり、三時に及んだ。この暗さは自然が暗くなったのではなく、神の子イエスの苦難と死を神話的に表現した暗さであろう。三時に主イエスは大声で、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これはアラム語で、「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。四つの福音書に、主イエスが十字架の上で語られた七つの言葉を記している。それらの言葉は、福音書の記者たちが十字架の意味を伝えるために、主イエスの口に乗せた言葉である。しかし、「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか」は激痛の中で、主イエスご自身が叫ばれた言葉ではないか。神を信じ、隣人を愛して共に生きよと示された主イエスは暴力的に否定され、十字架刑に処せられた。愛と真実のない「神不在」の暗黒が支配する世界である。主イエスは、その「神なき世界」から「我が神、我が神」と叫んで、どん底から神に祈り、神を求められた。この祈りこそが、神から切り落とされたと思えるところから神に結びつく、天と地を結び合わせる奇跡の祈りである。主イエスは、この祈りを神に捧げるために、どんな苦しみにも耐え、沈黙を貫き、十字架へと歩まれたのである。

傍に立っていた者たちは、主イエスの声を聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言った。ある者が走り寄り、海綿に酢を含ませて葦の棒につけて差し出し、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言い、飲ませようとした。覚醒させるために酢を飲ませようとした訳である。しかし、主イエスは大声を出して、息を引き取られた。その時、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。エルサレム神殿は、神と人とを隔てる至聖所に垂れ幕が下げられていた。刑場のゴルゴタと神殿の間は、かなりの距離があるが、主イエスの死の瞬間、垂れ幕が裂けて落ちたという。主イエスの十字架の死によって、神と人とを隔てるものが無くなった。人は皆、罪赦されて神と共にある。インマヌエルの福音が実現した。垂れ幕が裂けたことは福音のリアリティを表現している。

主イエスに向かって立っていたローマの百人隊長は、息を引き取られるのを見て、「まことに、この人は神の子であった」と言った。彼は、ピラトの尋問から十字架の死に至るまでの全てを見ていた。十字架刑を執行する役目を担っていた彼は、主イエスの神に委ね切った信仰を見、また、神への祈りを聞き、深く感動して「まことに、この人は神の子であった」と告白した。異邦人の中で、彼が最初の「キリスト告白」をした人である。

十字架の下には、ガリラヤにおられた時から、主イエスに従い、仕えていたマグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメらがいた。他にも、主イエスと共にエルサレムへ上って来た女性たちもいた。男の弟子たちは四散していたが、彼女たちは主イエスの十字架を悲しみ、胸が張り裂けるような思いで、主イエスの死を見つめていた。